ペン俳句会　句会報（第三六九号）

令和七年五月一日（木）

兼題『若葉』、席題『鳴』

句会を、先月四月と同じ場所で開催。投句八名。出席七名。（欠席は良知さん、ゆふきさん、金魚姫さん）

中村　晃也

佇めば若葉の香る散歩道
気まぐれの風を光に楠若葉
初鳴きの遠のいてゆく峪の昼
書に倦みてモダンジャズ聴く窓若葉
椎若葉喪がりの列の木遣り歌
関税の嵐に悲鳴花の冷え

宮原　凪

筆談のペン先奔り風五月
若葉風ゆるやかに押す車椅子
子燕や宅配便のチャイム鳴る
晩年のひと日くを余花の雨
ひこばえの花びら触るる小さき手
不忍池（しのばず）の水面に映る花明かり

松田　一文字

小さき地震つづく阿蘇山馬の夏
渓流の光る釣いと若葉風
空を切る飛行機雲や花菖蒲
風薫る水田に映る空の青
雷鳴の轟き渡る京の暮
菜の花や遠山白く空青く

浜口　金魚姫

落花舞ふ中を一人の道として
鶯の今鳴き始むぐぜり鳴き
溜め息をハミングに替え夏近し
古き葉を落として萌ゆる樟若葉
結界に桜蘂降る石蛙（天野山金剛寺）
若葉風鎮座ます石蛙（天野山金剛寺）

長尾　進一郎

木漏れ日の地の面(おも)に揺れ夏間近
リズミカルに庭木刈る人夏近し
鯉幟舞ひては休む遠峯(とおね)晴れ
気づく人居らぬ道の端すみれ草
はずむ声若葉眩しき通学路
自転車や頬に風受け初夏の道

安藤　晃二

観音の池のつつじや魚の影
寄り道の母常連の心太
道草や書店のドアへ飛花落花
つつじ山をちこちの株蒼残し
青葦やスワンボートの見え隠れ
鳥鳴くや陽の燦燦と柿若葉

大津　そうかい

緑青の正成像や楠若葉
せせらぎと蛙鳴（あめい）奏づる祝典歌
若鮎の天麩羅命ほろ苦し
別るるを延ばし延ばせり春深し
鶯や一服入るる登り坂
たそがれや椿の落花道明く

西川　知世

裏木戸へ石階二段仔猫鳴き
リラの香へ開け屋根裏の円き窓
ぬらぬらと浮かみ出づ鯉涅槃西風
一条の瀧を守れる谷若葉
戦争にこの身の遠し蒲公英黄
薬袋の軽き厚みや四月尽

次回は令和七年六月五日（木）。兼題は季語「梅雨」（中村晃也さん出題）、席題は西川知世さん出題の「立」です。

季語を学ぶ　　初学にかえって

西川　知世

立春から百三十五日目、六月十一、二日の入梅の日から三十日間が梅雨。暦の上の入梅は芒種の

後の似壬（みずのえ）の日が梅雨の入・小暑の後の壬の日が梅雨の明けである。気象庁による梅雨入り宣言とはかならずしも一致しない。

梅雨は揚子江流域と我が国特有の霖雨で、北海道では見られなかったが、地球温暖化によるのか最近、道南では雨が続く日があるそう。

古くは「梅の雨」、「入梅（ついり）」として詠まれている。江戸、明治を通じては「五月雨」として詠まれ、「梅雨」が詩趣をもつことが発見されたのは明治の終り以降のことである。

降音や耳もすふ成梅の雨　芭蕉
舟きては梅雨の晴間の帆を下ろす　水原秋櫻子
鰻屋の二階がよろし走り梅雨　阿波野青畝
梅雨みつめをればうしろに妻の立つ　大野林火
梅雨の犬で氏も素性もなかりけり　安住　敦
ふところに乳房ある憂さ梅雨ながき　桂　信子
抱く吾子も梅雨の重みといふべしや　飯田龍太
梅雨長しマリオネットの四肢に糸　齋藤朝比古
欠伸して梅雨の茸をふやしけり　ふけとしこ
鉛筆を噛めば木の香や梅雨ながし　中村苑子
夜学教師黒く大きな梅雨の傘　細見綾子
梅雨の駅貨車の全長動き出づ　西村和子
梅雨深しさみしくて魚発光す　小澤　實
勾玉のかたちに眠り梅雨籠　西宮　舞
蛍光灯に一本の紐梅雨の昼　鈴木鷹夫